詩集

こおろぎ

手塚久子

手塚久子（てづか ひさこ）
日本現代詩人会会員・日本ペンクラブ会員
現住所　〒240 横浜市保土ケ谷区上星川町372
上星川団地2—303

© 1986

詩集　こおろぎ　定価1800円
1986年1月31日　初版印刷
1986年2月10日　初版発行
著　者　手塚久子
発行者　津曲篤子
発行所　株式会社 彌生書房
162 東京都新宿区中町18　電話・東京(260)3707(代表)
印刷・太陽印刷工業（株）　製本・大口製本印刷（株）
落丁・乱丁本はお取替え致します
0092—86020—8525

詩集

こおろぎ

手塚久子

彌生書房

目
次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大寒の日 8
桜の別れ 10
彼岸の海 13
幻の海 16
葉　桜 18
紫陽花 20
藤村墓前祭 22
横浜史跡散策 24
夕映え 26
その時 28
闇のドラマ 29
露が光る 30
こおろぎ 32

小夜子曼陀羅 35
嵐のあと 42
一九八二年　四旬節 44
光の春 48
さようなら 50
一九八四年　夏 53
酷　暑 56
花吹雪 59
一九八五年八月 62
ありがとう 64
氷　壁 66
あとがき 70

詩集　こおろぎ

大寒の日

霜柱をふみしめる
寒気を貫いて消えた除夜の鐘は
すでに時の川底にしずみ
日常の淵にちぎれてのぞく
きのうまでの世相の貌
時間と時の二つの流れが
合わせ鏡に重なった　一瞬
きらりと光る
手鏡の中をわたしはくぐりぬけていた
厚い氷とつらら

せばめられた川岸にひびくのは
かすかないのちの水音
くっきりと立つ裸木が
小さな芽をのぞかせ
やがてくる時を奏でている
そんな夜明けの道で
いま　一匹の蟻をみた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

桜の別れ

花のむこう側から
声がする

歳月のカーテンにさえぎられた部屋でした
手足の自由を病魔に奪われてから
紫のすみれは眼を伏せ
華麗な薔薇の花は　いくどその葩をふるわせたでしょうか
あなたの闇の底で

笛吹川に　青い小石を投げる

『薔薇夫人』『日付のない日記』
血すじをたどるあなたとわたしの家系
時の環はめぐり
なつかしい祖父母たちが
川の流れに貌をのぞかせています
花影は桜
城左門氏の告別に病院をぬけだした
長田恒雄氏も
花吹雪のむこう側に　消え
『薔薇夫人』のころの熱い想いに
北園克衛・岩本修蔵・木原孝一氏……
詩人の肖像が
詩集のなかで　海の鼓動をきかせます
幻の大地を
音もなくすぎ去る　時の花たち

今年の花は
深尾女史の別れの桜と同じではないのに
いま　解き放たれた
『美しい季節』

すみれの花も　いっせいにはじけるでしょう
春雷
涙の谷間に影をおとすあなたは
ふるさとの湧き水になりました
一本の槍に貫かれた傷痕
はだかのキリストの脇腹から
やがて　血と水が流れるのをみるでしょう
千尾さん
主のご復活の日は
もうすぐですね

彼岸の海

父が眠る丘で
花たちがいっせいに眼をあげていた
咲き誇っているのではない
互いに　競い合っているのでもない
風のそよぎにまかせている小さないのち
不意に
告別の花輪を倒した春一番
あの突風が　わたしの髪を乱した
やわらかな光のなかで　声がする
ふりむくと

はらはらと桜の涙
墓石のまえでは
白百合の花が首を折り
アイリスの紫と金盞花が
地に伏したまま影を曳いている

いま　足をとめたのは
三浦半島観音霊園の下り坂
老木の根もとに
みごとに散りしいた花びらには
死相が宿りはじめた
夕闇に浮かびあがるひとつの貌
　父のようでもあり
　誰かに似ている
　だが……思いだせない

日没の輪が
ゆっくりと
幻の大地に　燃えつきる
一瞬の光芒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com